国際学術会議

「フェルガナと新疆のマザール」
(Mazars in Ferghana and Xinjiang)

新　免　　康

2005年11月26日（土）～27日（日）の日程で東京（水道橋・LMJジャパン東京研修センター会議室）にて、中央アジア（フェルガナと新疆）のマザール（イスラーム聖者墓廟）に関する国際学術会議が開催された。本稿は、本会議の発案者であり、オーガナイザの一人であった新免がその報告を行うものである。

本会議のオーガナイザは、代表者の澤田稔（富山大学人文学部）、菅原純（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、河原弥生（日本学術振興会特別研究員）、それに新免康（中央大学文学部）という4名が務めた。2日にわたった会議は、大きく3セッションから構成され、発表者は全体で11名であった。会議の出席者はおよそ50名で、規模はけして大きくなかったものの、発表者中の外国人研究者の割合は11人中8名、外国から招聘された研究者が所属する研究機関はウズベキスタン、カザフスタン、中国、ロシア、フランス、イギリス、韓国という7ヶ国に及び、国際学術会議と呼称して恥ずかしくない人的な構成が実現されたと考える。

本会議は、特定の研究機関や研究プロジェクトが開催・運営主体となる形態はとらず、国外・国内からの発表者・司会者・ディスカッサントの招聘旅費、会場費、宣伝費（ポスター作成など）、スタッフへの謝金など、様々な諸経費の財源について、下記の4プロジェクトが関わる形をとった。

- (財)なら・シルクロード博記念国際交流財団・シルクロード学研究センター・課題研究「中央アジアのイスラーム聖地の研究――フェルガナ盆地を中心に――」(代表者：澤田稔)
- 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究A (1)・研究課題「中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究」(研究代表者：新免康)
- トヨタ財団研究助成・アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題（特定課題）「新疆・フェルガナ両地域におけるマザール文書の調査・集成・研究」(代表者：菅原純)
- 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・中核的研究拠点（COE）形成プログラム「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(GICAS)サブプロジェクト「内陸アジア文字資料オンラインリソースの構築」(代表者：中見立夫)

フェルガナと新疆のマザールに関する学術会議を開催した理由と会議の趣旨については、新免が会議の冒頭のキーノートにおいて述べたが、その要点は以下の通りである。

中央アジア地域におけるマザールは、イスラームを軸としつつ土着的民間信仰などを含みこむ複合的な当地域の信仰体系の中で、重要な位置を占めている。現在でも多数の参詣者をひきつけるマザールは、地域社会における人的交流の結節点として、社会経済面においても一定の役割を担ってきた。したがって、中央アジアの地域性を考える上でも看過できない存在であると言える。このようなマザールに関する学術研究は、新疆についていくらか先行研究の蓄積が見られるとともに、近年はフェルガナにおける実地調査が進められている。しかし、いまだ基本的なデータが不足しており、学術的知見も体系化されていない。また、多面的な存在であるマザールを総体的に考究するための手法も、必ずしも確立されているとは言い難いように思われる。

そこで本会議では、各国より歴史学・人類学など関連分野における第一線の専門家を招聘し、彼らが一つの場を共有して、中央アジア、とくに隣り合うフェルガナと新疆におけるマザールの具体的様相に関する学術的なデータと分析の提示を行うとともに、マザールに対する研究手法などに関して意見の交換を行う。その上で、中央アジアのマザールに関する学際的な知見の蓄積と体系化に基づく、今後の本格的な研究のための展望を得ることができるよう試みる。このような会議は、世界でも初めてのものであると考えられる。

さて、以下に、セッションごとの発表を中心として、会議の内容の概要について紹介しておこう（敬称略）。プログラムについては本文末尾に添付したので参照されたい。

第１日目：11月26日（土）

総合司会担当の菅原純の進行のもと、まず、澤田稔がオーガナイザの代表として挨拶し、新免が会議の趣旨説明を読んだ。それに続く第１セッション（司会：東長靖（京都大学））では、イスラームに基づく民衆信仰としてのマザール参詣の一般的特質について、いくつかの側面から議論された。

澤田稔の発表は、2004年・2005年のフェルガナ地域におけるマザールの実地調査の結果に基づき、同地域のマザールの分類を試みたものである。マザールが、ロケーション、建造物のあり方、付随する施設、自然環境、参詣者の数などにおいて著しい多様性をもつこと、それにも拘わらずカテゴリーに分類することが重要性をもつことを指摘した上で、マザールに関わるとされる人物の性格付けにしたがって、5つのカテゴリーに分類する。(A) 預言者ムハンマドとその家族：ムハンマドの遺物を保存するムーイ＝ムバーラク、アリーに関わるシャーヒ＝マルダーンなど。(B) ムハンマドの教友（サハーバ）とその後継者たち（タービ

ウーン)、(C) アラブの中央アジア征服に関わる人物：クタイバ＝ブン＝ムスリムのマザール、サフィード＝ブランなど。(D) スーフィー：ブズルグ＝ハン＝トラのマザールなど。(E) 7人の聖兄弟。以上の5カテゴリーに大別される。さらに、ペーパーの末尾には、自らのプロジェクトで調査したフェルガナ各地の132箇所のマザールの一覧表を付す。

アシルベク＝ムミノフ（カザフスタン共和国教育科学省東洋学研究所）の発表は、中央アジアのマザールについて、葬られた聖者のあり方とその伝説、管理者（シャイフ）、参詣者と儀礼といった側面から多角的に検討を加えた。すなわち、イスラーム時代の聖地はイスラーム前の聖地と何らかの繋がりがあること、マザールに葬られているとされる聖者は、アリーやその息子のムハンマド＝ブン＝ハナフィーヤなど初期イスラーム時代の人物、スライマンやイスカンダルなど古代の預言者を含み、彼らには、奇跡譚を含む様々な伝説が付与されていること、マザールの管理者は葬られているとされる聖者の子孫を称するホージャであることが多く、聖者の伝説がその宗教的権威の基盤になっていること、参詣者たちはマザールで様々な儀礼を行うが、それには聖地の宗教的なポテンシャルを強調する意味があること、マザールにまつわる実践的なイスラームは、教義上のイスラームと大きな懸隔をもつものの、これら二者は並存していること、といった点を論じた。

ナディルベク＝アブドゥルアハトフ（フェルガナ地区博物館）の発表は、フェルガナにおけるアリーおよびその子孫に関する伝説、彼らにまつわる聖地に関して紹介した。すなわち、当地域においては、アリーが中央アジアを訪れた歴史的証拠はないにも拘わらず、中央アジア各地に関連づけられる形でアリーとその子孫たちに関する伝説が広範に、日常的に伝えられてきたこと、彼らにまつわる聖地は、アリーその人に関連づけられたシャーヒ＝マルダーンを初めとして、フェルガナ各地に散在すること、伝説の中では、アリーが身にまとっている青い衣装、アリーの馬であるドゥルドゥル、アリーの白い駱駝、もっていた剣（ズルフィカ）、イチジクの木、などがアリーに関する特徴的なイメージを構成しており、馬や駱駝についてはそれにまつわる聖地がフェルガナに存在すること、これら聖地は、ある種の自然条件（山・岩・泉・木など）を具えており、民衆の心性の中では、それらがアリーの宗教的なパワーと結びつけて認識されていたこと、などを述べた。

ラヒレ＝ダウト（新疆大学人文学院）の発表は、広範な実地調査をもとに、新疆のマザール信仰の実態についてとくに女性の信仰行為・儀礼に焦点を当てて検討した。まず、新疆のマザールの特徴について言及した上で、マザールへの参詣や儀礼への参加という点で女性が重要な比重を占めてきたと指摘した。具体的には、女性専用のマザールとして、カラハン朝の王族に属する女性（とくにサトク＝ボグラ＝ハンの娘や孫）に関わるものがあり、代表的なブウィ＝マリアムのマザールは子授けや安産を願う女性が特有の儀礼を行う場所になって

いること、スゥト＝バシムなど名もない女性のマザールも、子授け、結婚、病気治癒などのご利益を求める参詣対象となっていること、さらに、トルファンのトヨク＝ホジャム（アスハーブ＝アルカフフのマザール）でも女性参詣者たちの求める様々なご利益に応じてシャイフが呪術的な儀礼を執り行っていることを明らかにし、女性による参詣行為の動機付けの中核にあるのは、マザールの由来ではなく機能であると結論づけた。

第1日目のセッション終了後、会場近くのレストランにて懇親パーティーが行われ、一般の参加者も交えて親睦を深めた。

第２日目：11月27日（日）

午前の第２セッション（司会：小松久男（東京大学））においては、新疆とフェルガナの代表的なマザールとそこに葬られているもしくは関連付けられている聖者をとりあげ、様々な角度から考察する発表が行われた。まず、前半の2発表では、いわゆるカシュガル＝ホージャ家の著名な聖者であるアーファーク＝ホージャと新疆のカシュガルに位置するそのマザールについて論じられた。

アレクサンドル＝パパス（フランス・社会科学高等研究院）の発表は、現代中国において否定的にとらえられているアーファーク＝ホージャの、聖者とマザールに対する態度およびその時代の特徴について検討を加えた。まずアーファークがヤルカンド＝ハン国の君主により追放された際、広域的な布教活動を通して宗教的権威を確立したことを述べた上で、ジュンガルの援助により政権を掌握して以後の状況として、経済面ではイスハーキーヤを含む形でマザール信仰を促進し、ワクフ収入や喜捨収入を増加させる施策が実施され、政治面ではカシュガルのユースフ＝ホージャの廟（その後のアーファーク＝ホージャのマザール）を整備するとともに、ヤルカンドのイスハーキーヤ関連の「ダルガーフ」（すなわちアルトゥンルク＝マザール）を重視する姿勢を示すことを通して、統治の正統性の確保が目指されたと論じた。結論として、アーファークはスーフィーの旗印の下にアルティ＝シャフル統合の創出に努めたのであり、マザールの構築はその一環であったとする。

これに対し、エドモンド＝ウェイト（ロンドン大学）の発表は、1980年代以後のアーファーク＝ホージャに対するイメージのあり方について、マザールに関する実地調査の成果も織り込みつつ考察した。すなわち、「改革開放」後の公式的な言説の中でアーファークは、当地域を破壊的に統治した悪辣なスーフィーとして否定的な評価を受けており、このような考え方が知識人などに一般的に受容されていること、他方で、アーファークのマザールが政府により香妃墓と称され、ウイグル人と中国との結びつきを証明するための道具として使用されていることを背景として、実際の歴史的状況を誤解する形でアーファークが中国のスパイであったとする見解も、ウイグル人の民族感情を反映する形で一定の浸透を見せたことを指摘

した。その上で、少なくともマザールの位置する地域社会のアーファークに対するイメージはこれらとは根本的に異なっており、それを裏付けるように、近年政府により禁止されたものの、マザールでの儀礼が盛大に実施されていたことを明らかにした。

続く第2セッションの後半では、フェルガナの代表的なマザールであるタフティ＝スレイマン（ソロモンの玉座）について、それぞれ異なる視点から論じられた。

セルゲイ＝アバシン（ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所）の発表は、フェルガナの東部に位置するタフティ＝スレイマンと西部に位置するバーバーイ＝アーブをとりあげ、両者を比較検討することを通して、マザールの研究方法や分類法に示唆を与えることを目的とした。すなわち、両者はイスラーム的か否かという点において決定的な差異をもっており、コーランに登場する預言者のマザールである前者は、モスクやマドラサをともない、その伝説はイスラーム的特徴で彩られているのに対し、後者はイスラーム的な色彩が非常に薄く、一般参詣者は葬られている聖者をよく知らず、シャイフもホージャなどではない、しかし、両マザールは、「山のマザール」であるという点で顕著な共通性を具えており、両者の差異は周辺地域の歴史的な経緯の違いによるものであろう、と論じる。結論として、中央アジアにおけるマザール「文化」の特質を理解するためには、従来注意が払われてこなかったバーバーイ＝アーブのようなマザールに注目すべきであると説く。

これに対し、ティエリ＝ザルコヌ（フランス国立科学研究センター）の発表は、タフティ＝スレイマンを非典型的なマザールであると見なし、その根拠を三つの側面から分析した。第一点として、本マザールは、名前を冠された聖者たるソロモンが葬られた場所ではなく、足跡を残した場所、すなわち「カダム＝ジャーイ」であること、アーファーク＝ホージャについてトルファンなどに見られる「カダム＝ジャーイ」もマザールの一種と考えるべきであることを指摘する。第二の点は、ソロモンが「ジン」（精霊）のマスターとされることから、タフティ＝スレイマンは、ソロモンの力により人と「ジン」との交わる場所であると考えられると論じる。第3点は、本マザールの参詣行為が、「カダム＝ジャーイ」、滑り台の岩、水滴の落ちる洞窟、揺り籠の石など、丘の麓から頂上へと至る道筋上の各地点における様々な儀礼をともなう「旅程」としてとらえられることであり、これら3点から、本マザールは独自な様相を示しているとした。

27日午後の第3セッション（司会：梅村坦（中央大学））では、個々のユニークなマザールの歴史的状況・現状に注目することにより、マザールと地域社会との関係の具体的な様相に関して検討する発表が行われた。

王建新（中国中山大学人類学系）の発表は、トルファンにおける調査研究に依拠して、ウイグル人社会におけるマザールの位置づけを探究した。まず導入としてマザールの分類法と

その特徴を掲げ、トヨク＝ホジャム、アルパタ、ムルトゥクなどトルファンの主要なマザールの具体的な状況を紹介した上で、それらの特徴の分析を通して、マザールが、当地域のイスラーム化の歴史的記憶を背景とするイスラームの伝統であり、かつ現世利益の追求を軸とするウイグル人の民衆信仰の重要な構成要素であることを検証した。また、共産党国家の宗教政策の中で世俗的エリートはマザールに対して否定的ながらも民衆の慣習として妥協的に許容しており、宗教指導者たちはマザールのイスラーム的側面について肯定的ながらも土着的側面には批判的であり、一般のムスリムはとくに現世利益追求という面で重視していると論じた。最後にトヨク＝ホジャムを例にとり、最近のトルファンにおける観光開発がマザール参詣をとりこみ、変質させていることを指摘した。

河原弥生の発表は、アラブ勢力の中央アジア征服事業の中で重要な役割を果たし、フェルガナで死亡したとされるクタイバ＝ブン＝ムスリムのマザールの歴史的状況について、とくに自ら発見した文書の分析を通して検討した。まず、古くはナルシャヒーなどの歴史書に表れ、それ以後、現在のマザールにつながるマザールが同位置にあったことを述べた。19世紀に作成された4点の文書は、代々シャイフを務めた一族の子孫によって所有され、クタイバの伝記、クタイバの子孫の系譜、ファトワーからなる3点、コーカンドのフダヤル＝ハンによる免税証書1点からなる。ここに記された伝記が歴史書とは一致せず、きわめてローカルな性格をもつこと、系譜が捏造であることを明らかにした上で、19世紀にクタイバの子孫を名乗る一族が、マザールからの収益を得るため、あるいは税を免れるために必要な文書を作成するなど、活発な活動をし、それが実際に功を奏していたと推論した。さらに、自ら調査した2004年現在のマザールの状況について紹介した。

新免康の発表は、19世紀後半にカシュガル地域とフェルガナ地域にまたがる形で活動した、いわゆるカシュガル＝ホージャ家のブズルグ＝ハン＝トラの活動とそのマザールについて論じた。ブズルグ＝ハンは、1826年に清朝領のカシュガル方面に侵入したジハンギール＝ハン＝トラの息子であり、1864年に清朝領中央アジアで発生した大規模な反乱のなか、ヤークーブ＝ベグとともにコーカンド＝ハン国領からカシュガル方面に進出し、暫時カシュガルを中心とする地域で政権の座に就いたものの、その後実権を掌握したヤークーブ＝ベグによって追放され、メッカ巡礼に出たと言われる。文献資料によって辿れるのはここまでであるが、実地調査の成果として、彼のマザールがコーカンド東郊のケナガス村に存在すること、ブズルグの息子であるスルタン＝マフムード＝ハンとその子孫たちが代々そのマザールを管理・保持するとともに、歴史上、地域社会において一定の役割を果たしてきたことを明らかにした。結論として、中央アジアにおける宗教指導者の東・西トルキスタンにまたがる活動の一断面がこのマザールを通して窺われるとした。

最後の総合討論（司会：濱田正美（京都大学））では、3名のディスカッサントが、それぞれ第1～3の3セッションについてコメントを述べた。まず第1セッションについては大稔哲也（九州大学）が、専門とするエジプトの聖者（墓）崇拝の状況に関する知見を交えつつ、それとの比較において、中央アジアのマザールに関して、マザール「参詣」に該当する用語の問題、マザールのロケーションの意味、参詣の実践形態、聖者の奇跡と奇跡譚、参詣ガイドやワクフ文書などの文書、マザールの「経営」、政治権力との関係、マザール参詣に批判的な宗教指導者の存在、イスラーム化の歴史との関連性、民族運動・反乱におけるマザールの役割、という10にわたる注目ポイントを提示し、問題提起を行った。第2セッション担当のキム＝ホドン（ソウル大学）は、ロバの死んだ地がいつの間にか聖者のマザールに変成していくプロセスを述べたスヴェン＝ヘディンの伝える興味深い逸話を紹介して、民衆信仰としてのマザールの特質に注意を喚起した上で、マザールの拠って立つ経済的基盤やその社会的機能といった社会・経済的な側面に関する考究が不十分であることなど、本会議の発表全般に関わる重要な課題について、正鵠を射た指摘を行った。第3セッション担当の吉田世津子（四国学院大学）は、王建新の発表によりマザールがイスラームの普遍性と土着性とが相互作用する場であることを確認できたこと、河原弥生と新免康の発表には、中央アジアのマザールの研究を通してイスラーム信仰と実践の特質を明らかにできる可能性が示されていることを述べた上で、イスラーム復興現象をマザールを通して検討する必要性があること、マザールとモスクの親和性が遊牧地域には見られない、オアシス定住地域に特有な現象であることなど、重要な知見の提示を行った。その後、これらの問題提起に応える形で各発表者が回答とコメントを示し、マザール研究についてさらに知見を深めることができた。

以上のように、本会議では、現在当該地域のマザールについて考究している世界の第一線の研究者たちが場を同じくし、最新の研究成果の提示を行い、知見について情報交換を進めた。すなわち、まさに現時点における研究の到達点、調査の進捗状況を、発表と意見交換を通して確認し、それら情報を参加者で共有化することができた。この点において、本会議は一定の成果を挙げたと考える。また、それぞれ独自に研究を進め、相互に顔を合わせたことのなかった専門研究者の間の親睦が図られたという点においても、将来の研究を進展させていく上での基礎的な条件の醸成に資するものがあったと考える。

しかしながら、マザールが多面的な存在であることを考慮するとき、本会議における諸発表においては、政治・経済面との関わりに対する言及・検討の比重が低かった点は否定できない。また、マザールに関する研究手法として、実地調査による文書史料の収集・利用、地域社会における聞き取りが有効性を発揮することが確認されたものの、様々なディシプリンに属する研究成果をどのように統合化して体系的な知見を創出していくのかという点を含

め、今後の研究方向に関する議論が十分に尽くされたとは言いがたいように思われる。さらに、付随的な点ながら、「フェルガナと新疆」と銘打ったにも拘わらず、フェルガナ関係の発表が7、新疆関係が4とやや不均衡な形となったこと、両地域のマザールの状況を比較検討する視点がやや不足していたことも反省点である。

今後は、マザールの様々な側面に関する検討をさらに深化・進展させていくことはもちろんのこと、それらの学術情報を総合化し、集積し、共有化するための仕組みが必要であると感じられる。また、とくに他地域のイスラーム聖者墓廟の様相との比較検討といった、イスラーム地域全体を視野に入れた研究の志向性が要請されることは間違いない。将来的に取り組むべき課題は少なくないといえる。

最後に、個人的な気持ちの表明になって恐縮ながら、この場を借りて、本会議の関係者各位に謝辞を述べたいと思う。とくに多忙のなか、こちらの勝手な依頼に快く応じ、最先端の研究成果としてきわめて密度の濃い議論を開示された発表者の方々に、心より御礼申し上げる。また、貴重な意見・問題提起をいただいたディスカッサントの方々、完璧な議事進行をされた各セッション・総合討論の司会の方々にも深甚の謝意を表したい。さらに、通訳を担当されたムニサ＝バフロノヴァ氏、スタッフとしてお手伝いいただいた大学院生の方々（小沼孝博、塩谷哲史、清水由里子、野田仁、ムカッダスの各氏）にも大変お世話になった。

近い将来、本会議を基礎とし、その進化形として、新たな構想のもとにマザールに関する学術的な交流の場がふたたび設定されることを切に祈っている。

Program

Nov.26th

Welcome speech: Minoru SAWADA (Organizer, Toyama University, JAPAN)

Keynote: Yasushi SHINMEN (Organizer, Chuo University, JAPAN)

Session 1 (Chair: Yasushi TONAGA, Kyoto University, JAPAN)

Minoru SAWADA (Toyama University, JAPAN), "Towards Classification of Mazars in Ferghana Valley"

Ashirbek MUMINOV (Institute of Oriental Studies, Minstry of Education and Science, KAZAKHSTAN), "Historical and Theological Interpretations of Sacred Places in Ferghana Valley"

Nadirbek ABDULAHATOV (Ferghana Regional Museum, UZBEKISTAN), "Farg'ona vodiysida Hazrat Ali ('Ali ibn Abi Talib) kul'ti (in Uzbek language)"(Cult of 'Ali ibn Abi Talib in Fergana Valley)

Rahile DAWUT (Xinjiang University, CHINA), "Mazar Worship among the Uyghur Women"

*Reception 18:30 - 20:30

Nov.27th

Session 2 (Chair: Hisao KOMATSU, Tokyo University, JAPAN)

Edmund WAITE (London University, UK), "From Holy Man to National Villain: Popular Historical Narratives about Apaq Khoja in Kashgar, Xinjiang Province China"

Alexandre PAPAS (EHESS, FRANCE), "Promoting Saints and Mazars: The religious policy of Afaq Khwaja in 17th-Century Tarim Basin"

Sergei ABASHIN (Russian Academy of Sciences, RUSSIA), "Mazary Boboi-ob i Suleiman-tog: sravnitelnyi analiz (in Russian)" (Mazars of Bobo-ob and Suleiman-tog: Comparative Analysis)

Thierry Zarcone (CNRS, FRANCE), "Atypical Mausoleum: the case of the Solomon Throne (Kirghizistan): itinerary- pilgrimage, qadamgah and demons-cult"

Session 3 (Chair: Hiroshi UMEMURA, Chuo University, JAPAN)

Jianxin WANG (Zhongshan University, CHINA), "Cultural Connotation of Saint Mausoleums in the Turpan Basin: An Anthropological Approach"

to Uyghur Islam and Folk Beliefs

Yayoi KAWAHARA (JSPS Research Fellow, JAPAN), "Tazkira of Qutayba ibn Muslim and his Mazar in Ferghana Valley"

Yasushi SHINMEN (Chuo University, JAPAN), "Buzurg Khan Tora and his Mazar at Katta Kenagas Village in Ferghana Valley"

General Discussion (Chair: Masami HAMADA, Kyoto University, JAPAN)

Discussants:

Hodong KIM (Seoul National University, KOREA)

Tetsuya OHTOSHI (Kyushu University, JAPAN)

Setsuko YOSHIDA (Shikokugakuin University, JAPAN)

（中央大学文学部）